日本の植民地支配と台湾の近現代史

2026 **7.4（土）**

講演

京都大学大学院教育学研究科教授

駒込 武 さん

（こまごめ・たけし）

※同時、ドキュメンタリー映画上映

「黒潮に抱かれて ～与那国島と台湾～」

（制作／QAB琉球朝日放送）

■7月4日（土）
午後1時半開場～午後2時開始
於：国労大阪会館3F・大会議室
（JR天満／地下鉄扇町）

■資料代：800円（学生半額）

日本植民地時代の台湾総督府庁舎（現：中華民国総統府）

主催:南京の記憶をつなぐ2026　TEL090-8125-1757

7.4 日本の植民地支配と台湾の近現代史

◆講演：駒込　武（こまごめ・たけし）さん

（こまごめ たけし）さんプロフィール：１９６２年生れ。現在、京都大学大学院教育学研究科教授。日本における排外主義的ナショナリズム、レイシズムを批判する立場から、日本植民地統治下の台湾史を研究。アメリカと中国の覇権争いの狭間で、香港、台湾、沖縄と日本「本土」の知識人を繋ぐネットワーク構築に努める。

著書に『世界史のなかの台湾植民地支配』（岩波書店、2015 年）、編著に『台湾と沖縄　帝国の狭間からの問い』（みすず書房、2024 年）、訳書に『台湾、あるいは孤立無援の島の思想』（呉叡人著、みすず書房、2021 年）など。

台湾と中国との緊張関係をときほぐし、平和な東アジア世界をつくっていくにはどうしたらよいのか。その答えは決して簡単ではありません。そこには複雑な歴史がかかわっているからです。日本の高校歴史教科書では、台湾のことは「台湾出兵」、「下関条約による台湾割譲」、そして、戦後における中華民国への「返還」について簡単に言及される程度です。自分たちの意思にかかわりなく清国から日本に「割譲」された人びとが何を感じて、どのように行動したのか。またその半世紀後に、辛亥革命により清国を倒して成立した中華民国のもとに「返還」された人びとが、そこで何を感じ、どのように行動したのか。歴史教科書からはほとんどわかりません。ですが、こうした歴史を知らなければ、台湾が中華人民共和国の「一部」とされることについて、今日の台湾の人びとがどのように受けとめているかも、わかりません。まず歴史を学ぶ機会を設けたいと思います。

◆ドキュメンタリー映画（50 分）
「黒潮に抱かれて～与那国島と台湾～」

2026 年3月 29 日に QAB 琉球朝日放送が放映した内容を上映します。
（プロデューサー：中村 裕/director：塚崎昇平／撮影･編集：荒井太郎）

台湾海峡有事が語られる中、「前線」に位置づけられる台湾、そして与那国島。自衛隊や軍、国家間の外交や勢力争いに注目が集まる中、この島で根を張って生きる人々の姿は「国防」や「外交」の議論の枠組みからすっぽりと抜け落ちている。

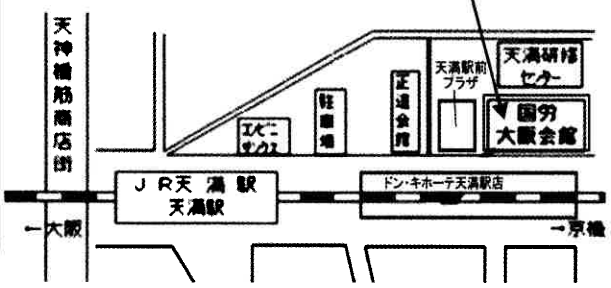
一方で、与那国と台湾がわずか 100 キロの距離で隣り合う位置関係は、政治や歴史がどうあろうと変わらない。それぞれの島の人々は独自に交流の歴史を積み重ね、今もそのバトンはつながっている。

与那国島と台湾、それぞれの視点を通し、国家体制や国際政治の中で「辺境」に置かれた人々の生きざまを伝える（紹介文より）。

賛同団体、賛同人になってください！

■賛同団体：南京の映画をみる会しが／日中平和研究会／日本中国友好協会大阪府連合会／「週刊金曜日」読者の会・大阪／大阪教育合同労働組合／教職員なかまユニオン／銘心会南京／関西共同行動

■賛同人：岡田光司／古賀滋／島田潤／田中泉／長崎由美子／中沢浩二／藤井幸之助／古橋雅夫／村上薫／森田徹／山田光一（2026年6月現在）

連絡先：南京の記憶をつなぐ 2026
TEL090-8125-1757

■会場：国労大阪会館　地図
（3Fまでの階段昇降機の設備があります）